

## 本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット:

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2022 青山和佳





2022.04.15

東京大学 東アジア藝文書院 30年後の世界へ  
東洋文化研究所・青山和佳（東南アジア地域研究）

共生をめぐる小さな自伝的民族誌  
—被暴力経験とその後

本講義は、トラウマ、つまり「激しく心身が傷ついた、あるいは傷つけられた経験の記憶」を扱います。トラウマについて話すことには危険がともないます。ひとつは、わたし自身が再び傷ついてしまう危険です。もうひとつは、聴いた皆さんが二次的に傷ついてしまう危険です。これらの危険をできるだけ避け、心理的安全性を確保するために、講義準備には慎重を期し、臨床心理士に助言をもらいました。その結果、今回は講義部分を事前録画することになりました。また、講義ノートでは、暴力についての直接的な表現をできるだけ避けています。大袈裟なくらい心配しているように思われるかもしれませんが、トラウマを扱うことはそれほどこころに負担がかかることなのです。

それでは始めます。どうかよろしく願いたします。

「私には、物語には私たちを結びつける力があるように思う。  
とくに何かを失ったり、悲しんだりしているときには」  
(レスリー・マーモン・シルコウ、トリン・ミンハ1995[1989]、218所引)

## はじめに

わたしはこの講義ノートを那覇で書いています。那覇はわたしにとって特別な場所です。それは、文字どおり、いのちを救ってもらった場所だからです。このことは、わたしにとって秘密ですが、その一部を皆さんに明かそうと思います。この講義では、「共生」を脅かすものとして、「他者の他者性を奪う」、つまり他者の存在そのものを否定するという暴力について、わたし自身が経験したことを自伝的民族誌(オートエスノグラフィ)の方法に準拠しながら物語るつもりです。具体的には、いのちを脅かされるような暴力の被害に遭ったことと、その後、現在に至るまでという極めて個人的な経験をお話しすることを通じて、共生の困難さと可能性という両義性を考えてみようと思います。

オートエスノグラフィーは、実験的エスノグラフィーのなかでもかなり自由アプローチであり、調査者が自己を調査するものです。その特徴は、一人称で語る「わたし」の存在が全面に登場し、自己の置かれている立場を振り返る(再帰的行為)だけではなく、自分の感情を振り返り、呼び起こす、内省的な行為でもあります。もうひとつの特徴として、エスノグラフィーの従来表現形式を問うことです(井本 2013, 104-105)。言い換えれば、わたしがこれから語る内容はあまりにも自叙的で、別の文脈で「学術的」とは評価されないかもしれません。それを覚悟の上で、この方法をとるのは、「共生」ということばをあえて生々しく提示し、みなさんに自分ごととして考えるひとつの材料を提供してみたいからです。

以下、第1節では、自分自身のこころの準備もかねて共生や他者ということばをめぐる3冊の哲学書に触れたあと、20代のころに起きた被暴力経験を短く想起します。第2節では、その出来事の恣意的忘却とトラウマ(心的外傷、ハーマン[1999 (1992)], 宮地 2013, 宮地編 2021)の想起について契機となった本や出来事に触れながら語ります。第3節では、トラウマの想起がもたらした重い症状からの回復は、他者一人や書物や自然—との関わりのなかでなされていったことを伝えます。むすびにかえて、那覇でいまあらためて共生をめぐる感じていること—境遇の偶然性、受動性と祈り、人間のことばを語らない存在による助け—について述べます。なお、読み手(聴き手)である皆さんに不必要な心理的負担をかけないよう、またわたし自身のこころを守るために、必ずしも出来事のすべてや感情のすべてを語るわけではないことをあらかじめご了承ください。それでは、どうぞお聴きください。

## 第1節 あの出来事

—3冊の哲学書をめぐりながら、わたしの「現実」を想起する

# 1. 共生とは何か、他者とは何か

暴力を被った経験を語ろうとするわたしの語りは、理路整然としたものにはなりにくいところがあります。これはなにも、わたしに限ったことではないようです(エムケ 2019)。何が起こったか語ろうとすると、そのトラウマに直接アクセスすることを避けようとして、何か別のことに迂回(回避)してしまう。たとえば、感情に蓋をして「知性」を働かせようとする。そのような迂回として、ここでは、宮本久雄、花崎阜平、トマス・カスリスという3人の哲学者による書物に拠りながら、本稿でいう共生や他者ということばをめぐる、わたし自身のところがまえを記しておこうと思います。

## 宮本久雄 —他者性を奪うこと、他者性を奪還すること

1冊目は、神学者・哲学者である宮本久雄による『パウロの神秘論—他者との相生の地平をひらく』（宮本 2019）です。本稿における「他者性を奪う暴力」という表現は、この書物に拠っています。パウロは初期キリスト教の使徒のひとりで、「パウロによる書簡」で知られるように新約聖書の著者のひとりです。パウロは使徒のなかでも、はじめはユダヤ教徒としてイエスの信徒を迫害していましたが、回心してイエスを信じる者になり、ヘレニズム世界に伝道をしたことで有名です。とくに異邦人（ユダヤ人の立場から見たユダヤ人以外の民族や異教徒）に伝道したことが重要です。

本書は、パウロは彼の〈今〉の終末論的危機にたいして神の愛のプラン(彼にとっての神秘)を生きぬくことによって闘ったととらえます。その上で、その「神秘」の内実と性格を読み直し、いまの閉塞感と危機を突破する鍵を探る哲学書です。その冒頭において、わたしたちの生の一回性が語られています。わたしたちの生は、「他者と絆をもち、各々がその生命を分かち合い、他者の生命と関わらないでは成り立たない」(宮本, 2019, 2)。

本書では「共生」ということばの代わりに、convivialityの邦訳として「相生」が用いられます。それは「相生かさね、相生かし、相生くという意味」(宮本 2019, 3)です。本稿では、この「相生」の意味で「共生」ということばを使います。また、他者とは「人格的個から始めて神や自然にまで及ぶ、自己に還元不可能で自己を変容させうる相生のパートナー」(宮本 2019, 467)を指しています。他者の拒みのことを悪と呼び、なかでも根源悪の現象の典型として、アウシュヴィッツ強制収容所(他者性を奪うだけの虚無の装置)、原子力を核とする巨大科学、「経済＝技術＝官僚機構」を挙げています。

本書ではパウロ的神秘の体現者と他者の物語りについても触れられており、そのなかで「物語り」(narrative)は、「何であるか」(一般的学知の探究法の前提としての「何性」)ではなく、「誰であるか」を常に中心とすることが強調されています。それは「小さく貧しい人々の他者性を一層尊重し、その人々の自己の自覚と自律を形成して相生の契機」(宮本2019, 459)となるものです。大きな物語(例えばイエスの時代に罪人や異邦人を排斥したユダヤ選民思想など)がどのように人間の他者性を奪うのか検討することは、人間の他者性を奪還する営みにつながるといいます。

## 花崎皐平 —加害可能性と受苦可能性

2冊目は、哲学者・詩人である花崎皐平の『アイデンティティと共生の哲学』（花崎 2001）です。社会運動に深く関わりながら執筆してきた著者は、リアルな人間と人間が手をつなぐときの重要な注意点を教えてくれます。この書物は、1989年夏にアジアの民衆活動家たちを招いて開催された「ピープルズプラン21世紀」を端緒とし、「世界先住民族会議」や「水俣宣言」を経て、著者が自らの思想を振り返り、21世紀への展望を問うた1冊です。

ここでは第9章「ピープルとしてのアイデンティティと共生」の一節「加害可能性と受苦可能性」に注目し、「おたがいにナニサマでもない者が、そのまま生きやすい関係をつくること」(関係をピープル化すること)、つまり「連帯する」という行動を可能にする前提として必要な自他理解とはいかなるものか見ておきましょう。

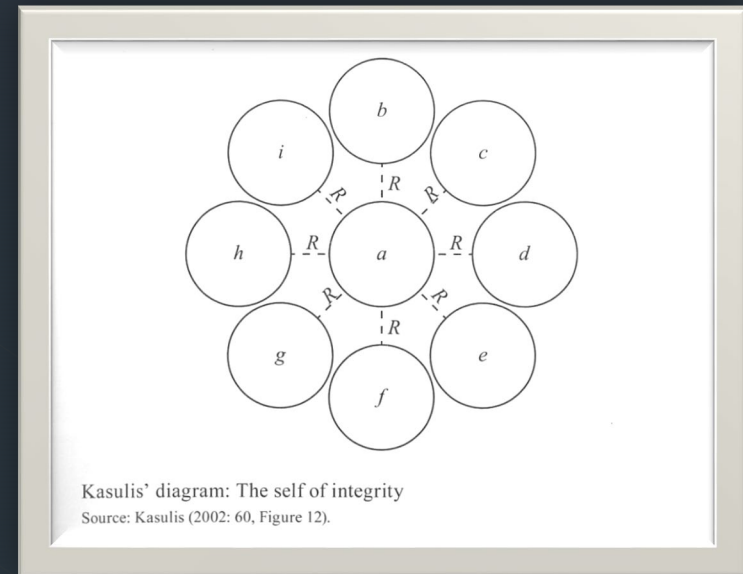
「水俣宣言」のしめくりには、「越境する政治行動、支援・連帯行動をつうじて『人びとは、自分たち自身の21世紀を力をあわせて作りだす『ピープル』となるのである』」という表現があります。著者は、ピープルとなることを目指したとしても、その意図とは逆にピープルではないもので終わるおそれがあると自戒しながら、「ピープル」ということばについて丁寧論じています。その議論の初めのほうにでてくるのが、「私もあなたも、ピープルは危うい存在である」(花崎 2001, 352)という警句です。

著者は、わたしもあなたも「悪の誘惑に負けたり、人を傷つけたり、人の顔色をうかがったり、そうかと思うと傲慢に見下したり、嫉妬や憎しみからのがれられなかったりする存在である」からこそ、「そういう悪と加害への可能性にからみつかれた危うい存在としての自己把握とおたがいそうだという共感にもとづく同等の意識が、『ピープルであること』の内容として必要である」(花崎 2001, 352)といます。ここで忘れてはならない点は、個人が意図しなくても、関係における加害・被害のさまざまな形態が現代社会では不可避の現象として存在するということです。

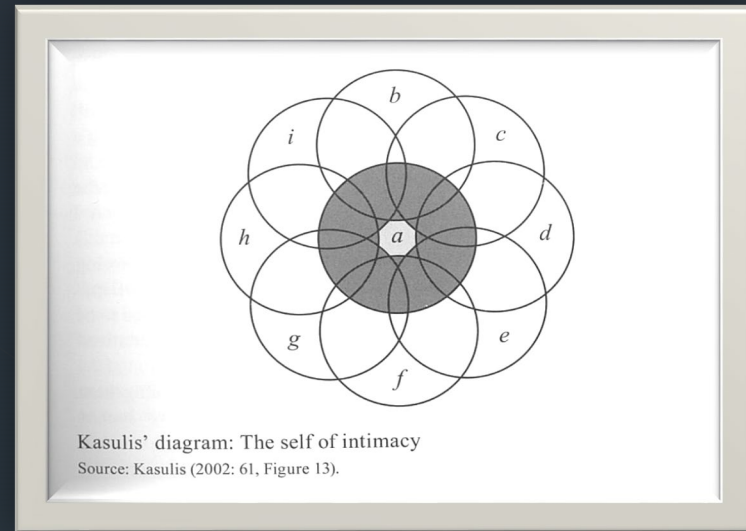
## トマス・カスリス —ふたつの文化的指向性と自己理解の違い

3冊目は、アメリカの哲学者で、日本の宗教と哲学を専門とするトマス・カスリスによる『インティマシーあるいはインテグリティー—哲学と文化的差異』(カスリス(2016 [2002]))です。共生というテーマを考える大前提として、わたしたちはまわりのひとびとや事物とそもそもどのように関係しているのか、振り返っておくことが不可欠でしょう。本書は、あらゆる文化に共存するインティマシー指向とインテグリティー指向というふたつの概念を通じて、なぜ文化をめぐる衝突や軋轢、摩擦が起きるのか解き明かそうとする哲学書です。自己と他者との関係性のあり方を考える上でのひとつのヒントを与えてくれます。

カスリスは、二つの文化的指向性においては自己理解のあり方が異なるといいます。インテグリティの指向性においては、「私のアイデンティティーは自我の固定した境界線に対応」しており、他者とつながることはあっても、そのなかに「私の一部であるものはない」と考えられます。「私自身を見出す」とは、「外的要素から独立した私という人間を発見することを意味」することになります(カスリス2016 [2002], 90-91)。




それに対して、インティマシーは「他者（人間ないしは事物のいずれか）との必要なつながりを伴っているので、（略）私のアイデンティティーは必然的に、別個のものとして自我の外にあるものと重なり合う」こととなります。この指向性においては、「『自分を見出す』とは、自分がどのように自分以外の多くの存在と互いにつながり、依存しあっているかを理解すること」を意味します（カスリス2016 [2002], 91）。



カスリスは、自己についてのこの二つの見方の相違を実存主義と仏教のあいだの差異のなかに見てとれるといいます(カスリス2016 [2002], 92)。みなさんは自分自身の生き方のどのような場面でどちらの指向性が前面に出ると考えるでしょうか。わたしの自身は、どのような場面でもインティマシー指向性が色濃い生き方をしてきたと感じています。わたしのそのような指向性の偏りは、人類学的フィールドワークを行う上ではプラスに働いてきたことが多いと感じていますが(Aoyama 2020)、同時に他者との関係をときに危うくするものでもありました。

## 2.被害者になる —米国深南部でのある夜の出来事

以上、哲学者3名とわたしなりに対話をしながら、他者性を奪うことは暴力である、人間には加害可能性も受苦可能性もある、わたし自身はインティマシー指向性が強いタイプであり、自他境界が交わりやすいということを把握してきました。気持ちも落ち着いてきましたので、わたし自身が他者性を奪われた、あの出来事について少し語ってみようと思います。



大学3年生のとき、わたしはアメリカの大学に留学していました。最初はワシントンDCにあるジョージタウン大学にいましたが、学費が高かったことと、ナイーブな好奇心から、南アラバマ州立大学に転校しました。わたしはいまよりなお未熟で、深南部[ディープサウス]の公立大学に通うことが何を意味するのか、しっかりとした想像力を持ってないまま、そこに行ったのです。そこはジョージタウンのようなアイビーリーグとは全く異なる世界で、アジア系学生は少なく、また出身国の構成も東アジアよりも東南アジアに偏っていました。そのような環境において、わたしと親しくしてくれたのが、ベトナム難民の学生たちでした。なかでもわたしに親切にしてくれたのが、Aという男子学生です。

家族や親族とともにアメリカに逃れてきたほかのベトナム人学生とは異なり、Aは独りの境涯でした。毎週末のようにグループで集まり、隣のミシシッピ州にあるビロクシにあるベトナム人の多い地区で一緒に過ごしました。その住宅にはエアコンがなく、それは当時のアメリカにおける貧困の一つの象徴でしたが、人びとの様子には活気がありました。そうして一緒に時間を過ごすうちに、Aとわたしとの間には親密な感情が育っていきました。しかし、永住権取得を目指していたAとは異なり、わたしには日本に帰国する日がやってきました。Aはそのことを怒っていたようです。ある晩、わたしがアパートのドアを開けると、そこにAがいて、わたしの生命を脅かすような暴力を振るったのです。


こうしてわたしは暴力の「被害者」になりました。わたしの被害は警察に通報されましたが、わたしは犯人が誰であることを告げず、正式な被害届も出ませんでした。何が起こったのかわからず頭が真っ白だったこともあるでしょうが、わたし自身は被害者であるはずなのに自分に非があったと感じてしまったからです。あるいは、いまでもそう感じています。ベトナム難民という境遇、孤独であるという境遇について、わたし自身の想像力がまったく足りず、Aを傷つけてしまったために、自分が罰を受けたのだと思いました。わたしはそのまま沈黙し、それからはベトナム人ではなく華人系マレーシア人の友人たちによってケアを受けながら、帰国するまでの日々をやり過ごしました。

第2節 恣意的忘却とトラウマの想起  
—さまざまな人と交わりながら

## 1. サマの人びとに生かされるフィールドワーク

アメリカから帰国したわたしは何事もなかったように大学を卒業し、大学院に進学しました。いま思えば、あのような被害に遭ったことを意識してしまうと生き延びることが難しくなってしまうため、恣意的に忘却したのでしょう。ただ、そうした痛みは無意識のうちに、わたし自身がもともと抱いていた社会のなかで声を奪われた人びとへの関心を強めることにつながったようです。博士論文では、フィリピンにおける都市最貧困層で、かつ文化的にマイノリティ化された人びとに焦点をあてました。具体的には、ミンダナオ南西部での内戦やその後の治安悪化で難民的性格をもってダバオ市に移住したサマの人びとの生活についてフィールドワークを行いました(青山 2006)。サマの人びとは「バジャウ」とも自称・他称される、東南アジア海域世界に広く分散居住する海民で、その一部は陸上に家屋を持たず船に暮らしていたことで知られています(長津 2019)。

当時、わたしの専門は経済学でした。経済学は論理実証主義に立つ学問です。わたしの場合も「事実」の観察をし、仮説を立て、それを検証するはずでした。そのためには、サマの人びとを「対象」として扱うこととなります。つまり、誰であるかよりも何であるかを問題とし、たとえば所得が一定の基準より低いから貧困者である等のカテゴリにくくっていくこととなります。いわば「表象の空間」(齋藤 2000, 40-41)において彼(彼女)と接するはずだったのですが、フィールドワークを続けていくうちに、わたしはそれができなくなってしまいました。わたしは、サマの人びとが何であるかよりも誰であるか、つまり「現われの空間」(齋藤 2000, 38-45)において出会いたいと願うようになりました。



しかし、「現われの空間」において人格としての相手と出会うということ  
はそうかんたんなことではありません。そもそもサマの人びととわたしと  
の間には重層的な権力の非対称性があり、意図しなくてもわたしは相  
手を傷つけてしまうポジションにあります。親密な関係性を築きながら、  
わたしはいつもどこか不安と緊張がとれないままです。ともかく20  
年以上、サマの人びとのもとに通わせてもらってきました。その時間の  
流れのなかで、サマの人びとが自分自身について、日々の暮らしにつ  
いて、人生について物語ってくれること、わたしがそれを聴くことを許し  
てきてくれたことは、わたし自身を生かしてくれてきたと思います。鼓動  
を共有させてもらう時間がそこにはありました。

## 2. 心理療法家とともに探る「記憶」

2018年5月、わたしは心理療法家の東畑開人さん(著書にたとえば東畑2019)のカウンセリングルームを訪れました。心身の不調があり相談相手がほしかったこともあります。話を聴いてもらうという経験をしたことも大きいです。ママの人びとが物語るのに耳を傾けるこのわたしは誰なのか、こころの専門家と一緒に探ってみたかったのです。精神分析的心理療法の適用になり、毎週1回決められた時間と場所で50分、心理療法家を相手にこころに浮かんだことを話してみることになりました。意外だったことは、わたしは自分のことを物語れないということでした。それは、「世界は危険に満ちている」という恐怖に由来していることが面接を重ねるうちにわかってきました。

「世界は危険に満ちている」という、わたしの恐怖感は、精神分析的心理療法の説明と絡めて言えば、さまざまなことで傷つき、こころを痛め、その生傷を抱えたままこころに無理をさせてきたことから生じているということになります(白金高輪カウンセリングルーム・サイト 2022.03.13参照)。ところが、あまりにも傷が深いいくつかの出来事についてはこころの奥底に封印しており、面接のなかでもなかなか語ることはできませんでした。そのうちのひとつが、アメリカでのあの出来事でした。語るができないまま、わたしに起きた変調が激しいフラッシュバックです。あの夜に起きたことがあたかもいま起きているかのように突然、それも鮮明に嵐のように想起される症状です。その記憶のなかのわたしは、凍結したように無抵抗でした(花丘編 2021)。

わたしはあの出来事から30年近く経って記憶をとりもどし、そのことによってかえって生きづらくなってしまった部分があります。しかし、記憶をとりもどす前にもどることは不可能ですし、回復を続けていけると信じるしかありません。サマの人びとの語りが時間を経て変化してきたように、わたしの語りも時間を経て変化していくでしょう。そのときに必要なのは、解決しにくい状態に焦らず付き合ってくれる存在です。「すぐには答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」のことをネガティブ・ケイパビリティ(箒木 2017)と言いますが、そのように共感をもって耳を傾けてくれる人があるとき、苦痛にも何らかの意味が与えられるのではないかと思います。

### 3. 「加害者A」が語らなかった戦争の記憶

2016年から5年間、わたしは仲間とともにアンソニー・リードの『東南アジアの歴史』という大著の翻訳に取り組みました(リード2021 [2015])。おもに植民地期と脱植民地期の時代を担当したわたしは、東南アジアという地域が被ったさまざまな暴力とそれにたいする人びとの抵抗について訳出することになりました。それはとてもやりがいのある仕事でしたが、東南アジアにおける日本の加害の歴史を扱いながら、たとえば、太平洋戦争で日米決戦の場となったフィリピンでは百万人を超える犠牲者がでたという文字から立ち上がってくる、本来一人ひとりにあったはずの顔を失ってしまった亡霊がわたしのなかに侵入してきてしまい、身動きがとれなくなることがありました。

同じころ、沖縄によく休みに行くようになりました。ある日、友人に連れられて嘉手納基地を眺めていたときです。ベトナム戦争中、ここから米軍爆撃機B52が直接戦地に向かっていったこと、それを目の当たりにした住民が「また戦争に巻き込まれるのではないか」と不安に陥ったこと、あるとき嘉手納基地内でB52が大爆発し近隣住民が負傷したこと(沖縄公文書館「あの日の沖縄 1968年11月19日」)、そういうことを知るにつれて、わたしは最初ぼんやりと、やがてはっきりと、アメリカでのあの出来事を思い出しました。生命の危機に瀕して仮死状態になったわたしは確かに「被害者」だったけれど、ベトナム難民のAもまた、ベトナム戦争という大きな物語における「被害者」だったのではないかと。

太平洋戦争中、日本軍占領下にあったフィリピンのレイテ島民の戦争を記憶について歴史研究を行なった荒哲は、戦時暴力の記憶について、テッサ・モーリス・スズキを引用しながら「特定のタイプの記憶は実際には忘却を促す可能性がある」と述べています(モーリス・スズキ 2005, 302, 荒 2021, 227所引)。具体的には、レイテ島民の戦争の記憶が「輝かしい」抗日活動や駐留日本軍兵士による残酷な出来事についての語りのみで形成され、一方で現在もフィリピンで微妙な問題である戦時中の対日協力や住民間暴力について関係者はほとんど何も語らないことを指摘しました。そのような沈黙は彼らが犯した暴力の甚大さを想像させるとともに、住民が過酷な戦後を生き延びるために恣意的に記憶を抹殺したからに他ならないと言います。考えてみれば、わたしはAからベトナム戦争の記憶を一切聴いたことがありませんでした。

### 第3節 呼吸をとりにどす

## 1. 救われるいのち

去年の8月、アメリカでのあの出来事のフラッシュバックの症状が重く出ており、あまりの苦しさに自分で自分の生命を危機にさらしてしまう事件がありました。その苦しみの最中に意識を失いながらも恩師と沖縄の友人にメールを打っていたようです。長い眠りから目覚めると、恩師からは電話の着信がいくつもあり、友人からは動けるようなら那覇に来るように、と航空券の予約確認書が送られてきていました。哲学者の岩田靖夫によれば、痛みそのものは無意味であるものの、それに耳を傾けてくれる者とコミュニケーションが始まるときに意味が生まれると言います(岩田2007)。わたしが痛みを訴える声に応答してくれた声がある。それを聴かなければ、と思いました。

ふらふらながらも那覇に到着し、友人の助けを借りながら、現地のホテルに3週間滞在することになりました。ときおり友人のお母さまが自宅に招いてくださり、何もきかずに、手作りの料理を食べさせてくださり、「ともかく食べればたいていのことは何とかなる」と微笑んでくださいました。一緒に出かけて、農産物直販所で地元産のナーベラー(ヘチマ)やタイモ(サトイモの一種)を手に入れたり、道端にたくさん生えているエンサイ(空芯菜)を切り取って持ち帰ったり、小さな花を見つけて摘んだりする、ゆったりと循環する時間を贈ってくださいました。庭のバナナの葉や地元作家の陶器に盛られた料理を食べるうちに、呼吸が楽になっていきました。

友人のお母さまは沖縄在住の作家で詩人の安里英子さんです。その本棚からわたしのために6冊の書物を選び、バンシルーとともにホテルに届けてくださいました。バンシルーというのはグアバのことで、中国語の蕃石榴(ふあんしりゅう)が変化してバンシルーとなったそうです。庭に自生して6年目に初めて収穫したという甘酸っぱい果実をかじりながら、琉球諸島が台湾、フィリピンを含む東南アジアと歴史的にも生態的にもつながりが深いということに胸をつかれる思いでした。6冊の書物は、「沖縄」というわたしにとっての「他者」を、基地や開発の「犠牲」の島々と一面的に捉えたり、祈りと暮らしの「美しい島々」と単純化したりすることを戒めるものばかりでした。

## 2. 他者の痛みをこころを向ける

那覇では、それらの「沖縄」に関する書物に加え、わたしはアイヌに関する2冊の本も読みました。日本において「他者の他者性を奪う」暴力が振るわれた歴史として、北海道が内国植民地であったことを忘れてはならないと思っています。それは個人的には、わたし自身が開拓農民の曾孫として札幌で生まれたというルーツ、また10年間ほどアイヌの語り部の方に「うちの娘」として可愛がっていただいた経験に根ざしているものです。読んだ本の1冊がリチャード・シドル著、マーク・ウィンチェスター翻訳の『アイヌ通史—「蝦夷」から先住民族へ』(シドル 2021[1996])でした。アイヌを従属化していった和人と、そのプロセスに介入・抵抗し、自らを先住民族として再定義してゆくアイヌの複雑な歴史が描かれています。

もう1冊は、石原真衣による『＜沈黙＞の自伝的民族誌(オートエスノグラフィ)ーサイレント・アイヌの痛みと救済の物語』(石原 2020)です。和人とアイヌの両方にルーツをもつ著者は、日本社会において和人もなくアイヌでもなく隠れアイヌでもなく声をもって存在することが難しく「サイレント・アイヌ」として生きてきたといいます。本書は、そのような自己の存在を歴史化し、沈黙を構造化することで、自分史、家族史を語りうる言葉を強靱に美しく紡ぎ出した稀有な作品です。わたしはこの作品に接したとき、不在の言葉を必死にさぐり自らを立ち上げていく著者の姿を前に、わたしにどこまで聴けるかわからないけれども、耳を澄まさなければと思うばかりでした。

こうしたアイヌに関する書物に加え、もう1冊、わたしにとってとても苦しい本も読みました。それは、下條尚志『国家の「余白」—メコンデルタ生き残りの社会史』(下條 2021)です。この作品は、長期にわたり領域国家に組み込まれてきたにもかかわらず、為政者によって捉えどころがなく、統治モデルを描きにくい地域であったメコンデルタを対象に、民族混濁的な多民族社会を生きる人びとの動乱下での生き残りの社会史を膨大な資料(オーラルヒストリー中心)を組み合わせて描き出す壮大な作品です。メコンデルタにはベトナム南部があることから、わたしはアメリカでのあの出来事を想起しながら、ベトナム戦争下でAやその家族がいかに生き残ろうとしたのか考えざるをえませんでした。

### 3.ぼうぼうの庭で一身のまわりにある共生

那覇を離れる直前、友人の実家から去ろうとして車に乗り込んだとき、大きな音がしました。何事かと車の外に出てみると、熟して黄色くなったバンシルーが樹から落ち、ボンネットに当たり、地面に転がっていました。それを拾い軽く拭いて、胸に抱きながら、ぐるりと見回してみると、庭はぼうぼうで、わたしには名前のわからないさまざまな植物が雑然と生えて地面を覆っています。植え合わせの相性を図ったとはきいておらず、それぞれの植物が地表に枝葉を伸ばし、地下で根を絡ませあって、それぞれに、そして全体として生きながらえている。そのような植物と土と水と大気の営みは、わたしが生まれるずっと前から連綿と続いていることなのです。そう気づいて虚を突かれました。

この庭の主は、前述の安里英子さんです。彼女は、沖縄が本土に復帰した5年後の1977年にミニコミ誌『地域の目』を発刊し、地域(シマ)の自治や文化を取材してきました(安里 1977a, 1977b)。彼女は琉球の精神世界と、米軍基地がある政治的な場所としての沖縄との関係に注目し、たとえば『凌辱されるいのち—沖縄・尊厳の回復へ』(安里 2008)という本を書いています。奄美から与那国など琉球弧の島々の聖地(御嶽)をめぐったり、相互扶助(ユイ)と女性たちの古代的祭祀を見続けたりする一方で、抵抗運動の続く韓国やパレスチナの人びとと交流したりするなど、感受性と想像力を働かせ、見えるものと見えないものの両方に配慮をし、共生を考えぬきながら生きてきた作家です。

島々の村落共同体を巡り、御嶽を訪ねて旅をした彼女は、御嶽とは何かについて二つのことを挙げています。一つは、御嶽とは祖霊神がおられる場所だということです。沖縄では人は死んだら神になるという考え方があります。もう一つは、自然の神で、木の神、火の神、風の神というようにそこらじゅうにいる神のことです。そして、彼女は御嶽の世界は沖縄の土地に根ざした小宇宙だけれども、もしわたしという人間のなかに御嶽があるのならば、他所の場所の人たちのなかにも御嶽があるはずだ、と書いています。御嶽は沖縄の言葉として表現されたものなのだけれども、これは普遍的な祈りに通じるものではないか、と(安里 2018, 344-346)。

▼  
むすびにかえて

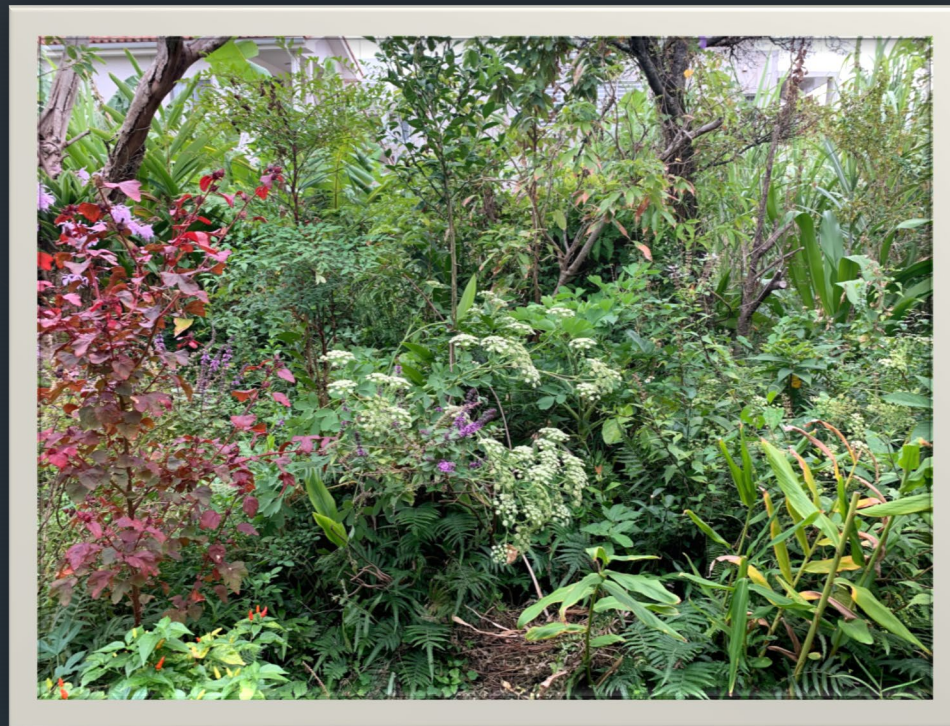
わたしはまだ那覇にいます。本稿では、「共生」を脅かすものとして「他者の他者性を奪う」という暴力に関して、わたし自身が経験したことを自伝的民族誌の方法に準拠しながら物語ってきたつもりです。個人対個人という次元で起きた暴力と、それを被ったこのわたしの経験という小さな物語りを中心にしてきましたので、大きな物語—たとえば、戦争や植民地、沖縄にある米軍基地のことなど構造的暴力—について明示的に触れることはできませんでした。これは本稿の紙幅の制約によるだけではなく、いまのわたし自身の想像力や構想力の限界でもあり、いずれ別の形で論じてみたいと考えています。

わたしがいま、共生をめぐる思い浮かべていることを3つ述べて、本稿を締めくくりたいと思います。ひとつは、境遇の偶然性です。わたしがこのわたしであることが偶然に過ぎないようにベトナム難民のAがAであることは偶然に過ぎない。そう考えてみると、わたしがAであったとしても不思議ではないし、Aがわたしであったとしても不思議ではありません。Aという他者はじつはわたしであったかもしれない。地上においてわたしとAとは傷つけ合う関係になってしまったけれど、生命の深層において、わたしたちは同じ根から生えている枝葉のような関係なのではないかと思います。だから、傷つけあったとしても根源的なところで相手を、そしてそれにつながる自己の存在を否定することはできないのではないのでしょうか。

そう考えたときに、もう一つ思い浮かぶのが、味方になってくれる存在に見守られながら、祈るということです。わたしはもうAのことを赦していると考えてきました。しかし、「考えてきました」というところが、じつはわたし自身のなかのひっかかりを示しているのかもしれませんが。アタマでどれだけそう考えようとしても、こころと身体はそれを拒否し、フラッシュバックを起こすことで抵抗してくるからです。この場合、共生とは、アタマ・レベルのことだけではうまくいかず、身体性をおおきく巻き込む動的なプロセスなのではないか、と思わざるをえません。わたしはわたし自身のことを動かすことができない。そのような絶対的な受動状態において、わたしに唯一できることは祈ることです。共生が困難であるからこそ、共生の地平がひらきますようにと祈り続ける、ということしかできないように思います。

さいごの一つは、安里英子さんの家のぼうぼうの庭が思いがけず、わたしの呼吸を助けてくれたように、人間のことばを語らない存在とのつながりを忘れないようにしたいということです。わたしの傷ついたたましいをいたわってくれた、たとえば、あのエンサイの炒め物を思い出します。あの日、海辺の散歩からの帰り道によった道端で、きれいな水が流れ込むぬかるみにエンサイが青青と群生しており、どうぞと語りかけてくれたこと、それを英子さんが嬉しそうに庭バサミで刈り取り、大ぶりの袋に詰めていたこと。誰が植えたわけでもない、誰が所有するわけでもない、そのエンサイを当たり前のように、しかし生命の尊さへの敬意を持って摘み取り、そして丁寧に食べたこと。振り返って、アメリカ時代、Aとわたしはミシシッピ川で採れたザリガニをカンボジア人の店から買い、よく一緒に食べていました。そういうとき、わたしたちはたしかに共生の一つの具体的な形を実践していたと、懐かしく思い出すことができる日が来るかもしれません。

ご清聴ありがとうございました。



2022.04.15

東洋文化研究所 青山和佳

2022年S Semester 東京大学 東アジア藝文書院 30年後の世界へ  
「共生を問う」

共生をめぐる小さな自伝的民族誌—被暴力経験とその後—

参考文献

日本語

- 青山和佳. 2006. 『貧困の民族誌—フィリピン・ダバオ市のサマの生活』 東京大学出版会.
- 安里英子編集兼発行人. 1977a. 『地域の目』 創刊号.
- 安里英子編集兼発行人. 1977b. 『地域の目』 第2号.
- 安里英子. 1991. 『揺れる聖域—リゾート開発と島の暮らし』 沖縄タイムス社.
- 安里英子. 2008. 『凌辱されるいのち—沖縄・尊厳の回復へ』 お茶の水書房.
- 安里英子. 2018 『新しいアジアの予感—琉球から世界へ』 藤原書店.
- 荒哲. 2021. 『日本占領下のレイテ島—抵抗と協力をめぐる戦時下フィリピン周縁社会』 東京大学出版会.
- 石原真衣. 2020. 『<沈黙>の自伝的民族誌（オートエスノグラフィー）—サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』 北海道大学出版会.
- 井本由紀. 2013. 「オートエスノグラフィー」、藤田結子・北村文編 『現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践』、104-111、新曜社.
- 岩田靖夫. 2007. 「苦しみ—『かなた』への突破」（連載「哲学とはなにか」第10回）『書齋の窓』、37-43、有斐閣.
- エムケ、カロリン著、浅井晶子訳. 2019. 『なぜならそれは言葉にできるから—証言することと正義について』 みすず書房.
- カスリス、トマス著、衣笠正晃訳. 2016[2002]. 『インティマシーあるいはインテグリティ—哲学と文化的差異』 法政大学出版局.
- 斎藤純一. 2000. 『公共性』 岩波書店.
- 下條尚志. 2021. 『国家の「余白」—メコンデルタ 生き残りの社会史』 京都大学学術出版会.
- 東畑開人. 2019. 『居るのはつらいよ—ケアとセラピーの覚書』 医学書院.
- 東畑開人. 2022. 『なんでも見つかる夜に、こころだけ見つからない』 新潮社.
- 長津一史. 2019. 『国境を生きる—マレーシア・サバ州、海サマの動態的民族誌』 木犀社.

ハーマン、ジュディス・L. 著、中井久夫訳. 1999 [1992]. 『心的外傷と回復』みすず書房.  
花丘ちぐさ編著. 2021. 『なぜ私は凍りついたのか—ポリヴェーガル理論で読み解く性暴力と癒し』春秋社.  
花崎臯平. 2001. 『アイデンティティと共生の哲学』平凡社.  
箒木逢生. 2017. 『ネガティヴ・ケイパビリティ—答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版社.  
宮地尚子. 2013. 『トラウマ』岩波書店.  
宮地尚子編. 2021. 『環状島へようこそ—トラウマのポリフォニー』日本評論社.  
宮本久雄. 2019. 『パウロの神秘論—他者との相生の地平をひらく』東京大学出版会.  
ミンハ、トリン著、竹村和子訳. 1995[1989] 『女性・ネイティブ・他者—ポストコロニアリズムとフェミニズム』みすず書房.  
モーリス・スズキ、テッサ. 2005. 「暴力を語ることは可能か」、倉沢愛子他編. 『岩波講座アジア太平洋戦争1 なぜいまアジア太平洋戦争か』岩波書店.  
リード、アンソニー著、太田淳・長田紀之監訳、青山和佳・今村真央・蓮田隆志訳. 2021[2015]. 『世界史のなかの東南アジア：歴史を変える交差点』（上下巻）名古屋大学出版会.

#### 英語

Aoyama, Waka. 2020. *An Intimate Journey: Finding Myself Amongst the Sama-Bajau*. Kyoto University Press + Trans Pacific Press.

#### ウェブサイト

沖縄県公文書館. 「あの日の沖縄 1968年11月19日」

[https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that\\_day/10616](https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that_day/10616)

(2022年3月13日参照)

白金高輪カウンセリングルーム <https://stc-room.jp>

(2022年3月13日参照)